

日本語インタビューにおける
「言いさし—割り込み」の連鎖
——対人コミュニケーションの視点から——

荻原 稚佳子

Sequence of Sentence-final Ellipses and
Interruptions in Japanese
Interpersonal Communication

OGIWARA Chikako

This paper aims to identify certain patterns in the sequence of sentence-final ellipsis (IISASHI) and interruption (WARIKOMI) in interviews with native Japanese speakers. IISASHI is the act of discontinuance of talking in which a speaker is interrupted by another's utterance and stops talking in the middle of a sentence, yielding ellipses, and WARIKOMI is the act of interrupting in the middle of a sentence by starting to talk. IISASHIs caused by WARIKOMIs were selected out of 2,905 IISASHI turns found in 85 ACTFL-OPI-type interviews with native Japanese speakers. Then, 6 distinct sequence patterns were identified by analyzing the function of the sequences and categorizing them by their similarity. The various functions, which the sequences play, include changing topics, supporting topics, giving opinions, fostering communications, emphasizing speaker's opinions, a shortened form of questioning with simplified phrases, replying, assisting, making corrections, etc. In interpersonal communication, WARIKOMI is found to be not always offensive, but an assertive action in which listeners assert themselves while showing respect for others' opinions. And it was revealed that there are linguistic rules, such as fillers and other expressions, for assertive actions to be smoothly carried out. Moreover, IISASHI yields ellipses after the sentence's discontinuance, but in many cases, the interrupting person, who performs WARIKOMI, interrupts after he gets enough information to comprehend the point and doesn't execute SASSHI, the com-

prehending the words not spoken. However, when SASSHI is conducted, it is not always conducted by listeners, but by both listeners and speakers.

キーワード: 言いさし、割り込み、連鎖、察し、アサーティブ

1. はじめに

日本人のコミュニケーションの特徴として、金田一(1975)は、「話さないこと、書かないことをよしとする精神」であることを挙げたが、対人コミュニケーションにおけるこうした特徴の現れの一つとして省略が挙げられる。これまで、こうした省略は、すべてを言わなくても相手が察してくれるだろうという意識的・無意識的な判断のもとに起こると説明されてきた。しかし、省略が生まれるのは、話者自身による省略だけでなく、相手の割り込みにより結果的に生まれた文末省略もある。この現象も、聞き手の察しが行われ、割り込むことにより聞き手としての役割を果たしていると解釈できるのであろうか。そして、割り込みのコミュニケーションは、対人関係において一方的な行為なのであろうか。

本稿では、省略の中でも文末省略を言いさしと呼び、日本人によるインタビュー中に見られる言いさしとその対応の中で、特に話者の意図ではなく行われた「言いさしと割り込み」の相互作用に注目し、その実態について考察する。

2. 先行研究

話者の発話途中で相手が割り込むことによって生まれた言いさしとは、話者の意図ではなく結果的に言いさしになったものである。「第一話者の言いさしによる発話—第二話者の割り込みによる発話」という一連の連鎖は、様々な視点から観察できる。

まず、ターンの交代という点では、Sacks, Schegloff and Jefferson (1974)が、「日常会話の順番取りシステム (the turn-taking system for conversation)」として、通常のターンの交代について以下のようなルールを定式化している。

1. 現在の順番における発言が最初の区切りに至ったとき、
 - (1) もしそれまでに、現在の話し手自身が次の話し手を選択したならば(呼びかけ+質問等により)、その選択された者は、次に順番を取って発言する権利を得、かつその義務を負う。そして順番は移行する。
 - (2) もしそれまでに、1(1)が起こらなかつたならば、現在の話し手以外の者が自分を次の話し手として選択してもよい。その時最初に話し始めた者が、次の順番を取る権利を得る。そして順番は移行する。
 - (3) もしそれまでに、1(1)も1(2)も起こらなかつたならば、現在の話し手が話し続けてよい。
2. もしその最初の区切りにおいて、結局1(3)に従って現在の話し手が話し続けることになるならば、1の(1)~(2)が再び適用される。そして最終的に移行が達成されるまで、同じことが繰り返される。

このルールに従えば、割り込みによる言いさしは、ルール1(2)がターンの移行に適切な場(transition relevance place)でないにもかかわらず施行されたものと考えられる。移行に適切な場とは、一発話が終了し、話し手がポーズを置いたところを指す(Sacks et al., 1974)。つまり、割り込みは不適切なターンの交代で通常的なターン交代ではないということになる。けれども、割り込みによる交代は、日常の会話において意識的、または無意識的に、ごく一般的に行われていることであり、頻度としても稀有な会話例とは断言しにくい。その点で、「日常会話の順番取りシステム」のルールだけでは、「言いさし—割り込み」の連鎖について十分な説明ができないと言える。

次に、ターンの交代の仕方に注目して、対人コミュニケーションにおける対人関係の心理学から考えると、第一話者が話しているにもかかわらず第二話者が発話を始める行為は、発話の主導権を侵害する行為であり、相手の発話意思を無視して自分の目的のために強引に自己を主張する攻撃的行動であるといえる。攻撃的行動とは、平木(1993)が自己表現上の特徴として3つに分類した行動(表1)の中の一つで、単に暴力的に相手を責めたり、大声で怒鳴ったりすることだけではなく、巧妙に自分の欲求を相手に

表1. 3つのタイプの自己表現の特徴一覧表(平木1993、27頁)

非主張的	攻撃的	アサーティブ
引っ込み思案	強がり	正直
卑屈	尊大	率直
消極的	無頓着	積極的
自己否定的	他者否定的	自他尊重
依存的	操作的	自発的
他人本位	自分本位	自他調和
相手任せ	相手に指示	自他協力
承認を期待	優越を誇る	自己選択で決める
服従的	支配的	歩み寄り
黙る	一方的に主張する	柔軟に対応する
弁解がましい	責任転嫁	自分の責任で行動
「私はOKでない、あなたはOK」	「わたしはOK、あなたはOKではない」	「わたしもOK、あなたもOK」

押し付けたり、相手を操作して自分の思い通りに動かそうとしたりすることである。

ただ、ターンを思い通りに操作しているという点では、第一話者にとって会話を支配されていることから攻撃的行為であるが、第二話者が割り込みにより第一話者を否定しているか否かという点では、会話内容を調べなければ決定できず、一概に攻撃的行動とは断定できないと思われる。

また、割り込みを対人関係におけるコミュニケーション・ストラテジーの一つとして捉えた West and Zimmerman (1983) は、割り込みは相手の発話の中断であるとした。男性が女性の発話中に割り込む割合が、その反対の場合より多いとした上で、中断は会話をコントロールするストラテジーの一つで、初めの話者が話し続ける権利を相手の話者が侵すことによって、自らの権力を行使する機能を持つとした。このような割り込みは一方が他方に向かって行う行為と捉えられ、権力関係や支配力を表すストラテジーと考えられている。

しかし、会話上の出来事は会話参加者全員によってなされると捉えている社会言語学者の立場では、発話重複や割り込みのストラテジーについて

全く異なる解釈をしている。Yamada (1992) や Greenwood (1989) は、割り込みは互いを妨害するものではなく、協力的で心地よい会話である場合も多いとする。また、Tannen (1984) は、割り込みを重複の一部として考え、相手の発話と重複して発話する行為は、会話参加者の会話スタイルによって、権力行使的な割り込みと捉えられたり、妨害ではなく同調的・協調的な会話と捉えられたりしている。そして、後者を深い巻き込み型 (high involvement style) の会話スタイルと呼んだ。

このように、すべての「言いさし—割り込み」の場面で、攻撃的、または、支配的か協調的であることに疑問が残り、割り込みによるコミュニケーションの機能について相互作用の中で考察する必要があると考えられる。

さらに、第一話者の話が終わらないうちに話し始めることから、第二話者の察しが働いているのかどうか注目すると、聞き手の役割の視点から割り込みについて捉えることもできる。堀口 (1997) では、聞き手の役割として「あいづち」、「予測」、「省略の復元」の3点を挙げており、その中の「予測」の機能の中の「先取り発話」(聞き手が話し手の話している途中でその先まで予測して、それを話し手が言う前に先取りして言うこと)が言いさしを生む割り込みにあたる。そして、聞き手が予測できる理由として、文法や話し手についての知識・関係、常識、前提知識などを挙げている。

だが、予測できる理由が文化や文脈・前提条件が中心的であることに、それ以上の問題点の解明を放棄している面が否めず、疑問が残る。また、「割り込みが常に予測を伴い、先取り予測をするのは常に聞き手である」という枠組み自体に、コミュニケーションの相互作用に限定性を与えているという懸念がある。これらの疑問に答えるためには、多くの現実の会話例について分析をする必要があると思われる。

以上の点から、本研究では、「言いさし—割り込み」を一連の相互作用による連鎖と捉え、多くの会話例の中から詳細な分析を行うことで、割り込み行動の目的、第一話者を否定する攻撃的行動か否か、聞き手としての察しの有無など、「言いさし—割り込み」のコミュニケーションの実態が解明

できると考える。

3. 本研究の枠組み及び分析方法

3-1. 研究目的と用語定義

本研究の目的は、文末省略である「言いさし」ターンとそれを生む割り込み対応の相互作用における制度的状況を解読することである。制度的状況を解読するとは、一見でたらしめに見える会話の中に基本的な構造があることを発見することである。詳細については、研究方法において説明する。

言いさしとは、「文末が省略されたために、文として完結されなかったもの」をいう。また、文とは、「ある文型・文法事項を含んだ完結したまとまり」とする。ただし、「から」「けど」「が」などで終わる節で、その節に一つ以上の文法・文型を含む場合は、述部が認められなくても、情報として完結しており、内容的に省略した部分がないと客観的に判断できるものは、文に相当すると考える。

本稿で取り上げる言いさしは、言いさしに対する割り込み対応を中心に分析を進めるため、「ターンの最後の部分において現れた言いさし」のみを取り上げる。つまり、言いさしターンとその次のターンでの対応により、割り込みがどのような形で現れているかを分析する。

ターンとは、Maynard (1987) に従い、「お互いの話者が機能的に、また意味的に発話内容を認めた単位」とする。そのため、下記の会話例 E1 の「あー、はい」は、R1 の質問に対する答えであり、R1 が「あーそうですか」と応答しているので、機能的にも意味的にも発話内容を両者が認めたと考えられるので、ターンとするが、R1 内の E1 による「はい」は、話者の R1 がそれに対して何の反応もせず、話を進めており、意味的に発話内容を認めたとはいえないので、ターンとしない。

以下、インタビュアーを R、インタビュー対象者を E で表し、そのあとの数字は対象者番号を示す。() 内はターンと認められなかった相づち、「?」は上昇イントネーション、「//」はポーズや途切れ、「××」は明確に聞き取れなかった音、「...」はその部分の会話について文字表記を省略していることを表す。

会話例:

R1: あの、友だちと出かけたり、することありますか？

E1: あー、はい。

R1: あーそうですか。じゃあねえ、次にもう一つだ、あ、ロールプレ
イして (E1: はい) いただきたいんですが。

3-2. 分析方法

分析には、ACTFL-OPI¹⁾の形式と話題選択を利用して行った日本人同士のインタビューの日本語コーパス(上村 1998)と、同様の方法で新たに行ったインタビューを利用する。これは、初対面の日本語母語話者同士が1対1で行うインタビューで、自然な会話によって約25分間、簡単な挨拶から始まり、趣味や日常生活、仕事、社会問題まで様々な話題を取り上げている。このインタビュー形式を選んだ理由は、独話などとは異なり相互性があり、対人コミュニケーションが行われる様々な場面に対応した自然な会話であると判断したからである。非母語話者に対するACTFL-OPIは、言語運用能力を試すためのテストであるが、今回は母語話者間のインタビューで、言語能力を試す目的はないので、不自然な質問などはなされておらず、ACTFL-OPIでの話題選択を利用した一般的なインタビューと捉えられ、話者間にテストであるという心理的な負荷はないと考えられる。新たなインタビューにおいても同様に行われ、対象者から心理的な負荷を感じたという感想はなかった。

インタビュー対象者は、18歳～60代の日本語母語話者、男36名、女49名の合計85名で、学生や主婦、社会人である。インタビュアーは、ACTFL-OPIのテスター資格をもっている日本語教員7名(男3名、女4名)により行われ、日本語コーパスでは男性18名、女性32名を、新たに行ったインタビューでは男性18名、女性17名を対象者とした。

分析の手法は、インタビューの文字起こし原稿から、ターンの最後の部分において文として完結されなかったものを抜き出し、それに対する次のターンをとった話者の対応がどのような表現形式を用い、どのような機能を持っているかを検討する方法を用いた。これは、エスノメソドロジーの

会話分析における手法である。

メイナード(1993)によると、会話分析という分野は、もともと社会学の関連一派であるアメリカのエスノメソドロジスト(ethnomethodologists)、特に Sacks, Schegloff, そして Jefferson 等によって樹立されたものである。エスノメソドロジーにおける会話分析においては、「人々はその場その時の現在で、どのように会話しているのかを詳細に見つめ、分析することで、相互作用能力や会話組織化の装置、会話現象を構成している人々の現実認知の様相を具体的に抽出・呈示している」(好井 1999)という。

「言いさし—割り込み」の連鎖についても、それが日本人コミュニケーションの特徴であると意識したり、何らかの規則を意識したりしながら会話をしている人はおらず、無意識のうちに行われることによって制度性が成り立っていると考えられ、本研究においても適切な分析方法であると判断した。

4. 分析結果

分析の結果、85のインタビュー中、「言いさし」が現れたのは、合計2905箇所(1インタビュー平均: 34.18)であった。インタビュアーと対象者の総ターン数は同じであるため、「言いさし」は両者に同じ頻度で現れる可能性があるが、インタビュアーによる「言いさし」が1562、インタビュー対象者による「言いさし」が1343で(1インタビュー平均: インタビュアー18.38、対象者15.80)、インタビュアーによるもののほうがやや多く見られた(荻原 2001)。

この中から、割り込むことでターンを取ったために生じた「言いさし」の場合を、割り込みの行為が持つ機能別に分析していく。割り込みの判断基準は、第一話者の発話が句の終わりなど Sacks 等(1974)のいう移行に適切な場ではないのに言いさしになっている場合、第一話者と第二話者の発話に重なりがあった末に第二話者のターンになった場合、ターンの移行がポーズを含んでおらず、第一話者のターンが不自然に終了した場合である。それ以外は筆者が主観的に判断した。

以下に、機能を中心とした分類に従い、会話例から記述的に分析する。

4-1. 会話の流れに関係する割り込み

4-1-1. 話題を変えるための割り込み

同じ話題が続いたり、話者の話が長く続いたりしている場合などに、主にインタビュアーによる割り込みで、話を次に進めようとしている例が多く見られた。例1のE63は「ならないとか」でイントネーションも下がっており、ターンを継続するつもりだったと思われるが、「はい、わかりました」のような直截的な表現が使われて、唐突な割り込みがなされていた。

例1. (選挙運動中のセクハラ事件についての会話)

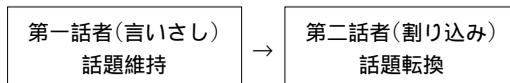
R: あ、×たしか、車の中で結局、二人が後部座席にいて前にたしか警察官もいたんですね (E63: あー)、運転手もいて。そういう状況だったんです。

E63: えーっ。でもそれでも、/も、そしたらなんかもう、わかんないですけど、そこまでその人とかの状況は。したらなんか、例えば、まー、なに、ああいう高級な車とかには壁がある (R: はい) のかもしれないですけど、ないようだったら例えば後ろ二人で話すようにしないで、みんなで話すようにすればいいじゃんとか。そしたらそういう状況にはならない (E: うーん) とか

E: はい、わかりました。えーと他に何か、最近、印象に残った、ニュースとかありますか。

この割り込みは、インタビュアーとしての役割を果たすためになされたもので、第一話者は対話全体の進行をしているインタビュアーの役割を尊重して、ターンを簡単に渡していると考えられる。つまり、会話管理者としての力関係が現れたものである。

【連鎖1: 話題転換のための割り込みの連鎖】



4-1-2. 話題を継続するための割り込み

例2も例3も、Rが「それから」「じゃ、もし」などの言葉で、次の質問

に移ろうとしているが、Eはそれを無視するかのように割り込み、「あ、でも」「やっぱり」のような逆説的な表現や自説を肯定する表現を使って、同じ話題について説明を続けている。そこには、その話題を継続したいという強い意志が伺え、インタビュアーの会話管理力より、Eによるターン維持の方が強い様子が如実に現れている。

例2. (就職したい会社について)

R: でも、E66さんとしては、し、そ、そういう会社—には勤めたくない。

E66: そうですね、いやですね。

R: いや?

E66: はい。

R: わかりました。それから、

E66: あ、でも実際会社に勤めてみれば考え方が変わるとは思いますけど、まだ、そういう社会のことについて知らないんで、うん、まあ、そう思ってるんです。

例3. (ロシアの潜水艦事故の責任について)

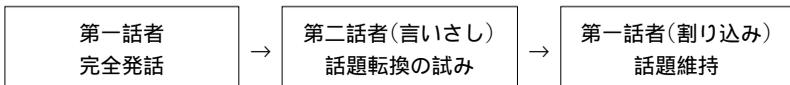
R: あれは、××、×ブーチンのなんてか対応が悪いと (E65: はい)、思いますか。

E65: 思います。

R: じゃ、もし、

E65: やっぱり、偉い人になると (R: うん)、自分をかばいたくなっちゃうじゃないですか (R: うーん)。普通の人もそうだと思うんですけど (R: うん)。そういうのが出ちゃったんじゃないでしょうか。

【連鎖2: 言いさし—割り込みによるターン維持の連鎖】



4-2. 第一話者の話の内容に誘発された割り込み

4-2-1. 反論のための割り込み

相手の意見に対して反論をする場合は、「でも」「それはちょっと」などの逆説の接続詞や納得できないことを表す表現を使って、割り込みをしていることが多い。この割り込みでは、第一の話者の発話が不自然な形と言いさしになったり、第二の話者との重なりがはっきり現れたりする点が特徴で、強力な割り込みに第一話者がターンを維持できなくなったというやり取りが顕著である。これらは、第一話者の話の内容が契機となって生じた言語行為である。

例 4. (顔の美容整形について)

E57: あんまりいじらないほうがいい感じがしますけど。

R: でもやっぱりいじるっていうか、しゅ手術を受ける人から言わせれば、二重にしてー、それこそきれいになって、しあわせな生活 ×
×

E57: でもあやしいですもん絶対わかりますもん、なんか友達とかでした人いますけどー、おかしいです明らかに、もー目ーずっとみはってるって感じの目になってー (R: うん)、すごいやっぱりぞ、造形したって感じが、するのでー...

4-2-2. 意見述べのための割り込み

R が文末まで言い終わる前に内容を察することができて、それに対して意見を述べるために割り込む場合に、相手の言葉の一部を繰り返して割り込む例が多く見られた。繰り返しにより、一見、相手に同調しているように見えるが、決して賛成意見を述べているわけではなく、相手にとって抵抗感の少ない割り込みをするために繰り返しが使用されていると考えられる。この場合の繰り返しでは、「～っていうか」が多く使用されていた。

例 5. (ドーピングで金メダルが剥奪されたことについて)

R: うーん。ただ結局、いる、いろんな報道見ると (E79: はい)、彼女はまー、いけにえというか、スケープゴートというか、ドーピング検査を、ドーピングを禁止するための、て、禁止するために、

もうそれを、広めるための、まー見せしめになったっていう
E79: 見せしめっていうか、要するにドーピングは、仮にですよ、あの風邪薬から、その一、検出されたにせよ、そういうものを、あの一、使ってはならないというふうに決めた以上は(R: うん)、やはりそれはしか、しかたがないことです...

この割り込みの場合、反論の割り込みと比較して、相手の言葉を繰り返す、または、「そうですね」と同意表現を示すなどの言語行為があるために、直接的な反対意見に聞こえず、比較的強力な印象を受けない。第一話者にとっても、割り込まれた後しばらく第二話者の発話内容を聞かなければ、反対意見、賛成意見、意見の補強のいずれなのかが判断できない。そのため、かなり強いターン維持の動機がない限り、遠慮してターンを譲ってしまうのではないかと考えられる。

この場合も、第一話者の話の内容について察しながされ、その内容に誘発されて、意見などの強い動機が生じた場合、「言いさし—割り込み」の連鎖が生じると言える。

【連鎖3: 内容に誘発された割り込みの連鎖】



4-3. 第一話者のターン維持の間で相手に同調する割り込み

4-3-1. 強い感情による割り込み

例6では、相手の発話内容に強く触発された感想を、Rが相手ターンの終わる前に述べている。Rが「好き」「大好き」を連呼していることから、その感情の強さ、つまり、発話への強い動機が現れている。

例6. (映画のストーリーについて)

E77: えっとね、すごくて、私は、私自身は見ていて、めっちゃくちゃアメリカ的だなって(R: うんうんうん) 思ったんですね、あの映画っていうのは。でー、なんかアメリカって、その、正義とか(R:

はいはい)、国を守るとか(R: はいはい)、あ、その、愛する人のために

R: 好きですよね。大好き、大好きですよね。

E77: 好きですよね。あのもう私なんかは、いいなって思う反面、熱い、なんて醒めちゃう(R: うん)ところもあるんですけども、...

この例の通り、R はターンを取る前に E の発話中に相づちの形で「はいはい」と話の内容を察して同調していることを示しており、その後感想を表明することでターンを取り、話を盛り上げる効果を生んでいる。それに対して、E も「好きですよ」で、R の言葉を繰り返して R の盛り上げに一度は答えた上で、ターンを取り戻し、話の続きをはじめている。第一話者は、一度ターンを譲っても、ターン維持の強い意志がある場合、相手のターンを生かす形で話を続けており、第一話者のターン維持力が継続していると思われる。

4-3-2. 相手の話を強調する割り込み

話者の話を盛り上げるために、割り込みの形で第二話者が一言付け加え、その後第一話者が続きを述べて自己補完する例が見られた。第二話者のターンがなくても第一話者の話は完結するが、このターンがあることで話の内容のポイントが強調されて浮き彫りにされるという効果が出てくる。

例7の場合は「どこだろうと」を、例8の場合は「他の人が見ている」を割り込みして付け加えることで、それぞれ万人にとっての問題であることや、人前であることが強調されて、第一話者の話の意図・ポイントがより鮮明に生き生きと伝わってくる。第二話者の割り込みが、ドラマにおける効果音のような機能を果たしていると考えられる。

例7. (異文化に適應する方法について)

R: なるほどね。それはだから相手がアメリカ人だろうと、ま、日本人だろうと、

E45: どこだろうと

R: 共通の問題だ、という訳ですよね。

E45: そうですね。

例 8. (帰国子女の行動で驚いたことについて)

E64: 帰国子女ですので (R: はい)、あのー、男の子が遊びに来たことがあってね、で、い、一度あの、外出先で会って紹介されて (R: うん)、で、そのときも、あのー、面と向かってそれこそお母さん若いんですねとか、お姉さんきれいですねっておっしゃるんですね。

R: あ、その、はいはい。

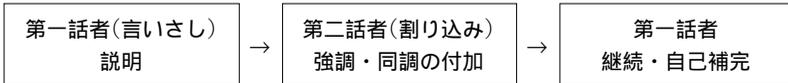
E64: その、坊ちゃんが (R: はいはい)。で、私たちとしてはその慣れてないので (R: はー)、しかも外で言われるんで、

R: 他の人が見ている。

E64: (笑)びっくりしちゃうんです (R: あー)。で、その方、と、またつい最近、あのー、うちに遊びにみえて、...

これらの「言いさし—割り込み」の連鎖は、Tannen (1984) のいう深い巻き込み型にあたるものだと考えられ、一つ的话题に相手も共感を持って参加している相互行為とみなせる。

【連鎖 4: 言いさし—同調割り込み—自己補完の連鎖】



4-4. 時間節約の割り込み

4-4-1. 思い付きの割り込み

第一話者が第二話者のために説明をしている途中で、第二話者が何かを思いついた瞬間にすぐ発話を開始して割り込んでいる例が多く見られた。例9では、ドーピングについて知らないと言う E のために、R が説明しているが、説明を最後まで聞かないうちに E がその内容について思いたし、思い出した時点で「あーあー」と割り込んで了解したことを表すサインを出している。自分がわからない点を説明するために、R に少しでも無駄な時間を使わせないために、R の発話を遮って対応しているように聞こえる。E はこの後、ドーピングについての意見を述べている。

この割り込みも、瞬間的に割り込むため、第一話者の発話は、語や句の途中で言いさしになる不自然なものが多い。

例 9. (ドーピングについて)

R: 来月からオリンピックが始まります (E63: あっ) よね (E63: はい)。あの、オリンピックの中の話ってというか問題の一つにあの、ドーピングってありますよね。あの、ドーピング知ってます？

E63: 知らないです。

R: あのー、水泳とか陸上の選手とかが、あの、興奮剤みたいなものを飲むん

E63: あーあーあー、はいはいはい。...

4-4-2. 質問内容がわかった時点での割り込み

例 10 は質問を最後まで聞かずに質問内容がわかり、その瞬間、E が話し始めている例である。質問者が自ら言いさしの形の質問を意図する場合もあるが、その場合は「いらっしやる」など句として成立する箇所と言いさしをしていた(荻原 2001)。割り込みの場合は不自然な場所で言いさしになっており、R の意志による言いさしではないと判断できる。質問に答えている割り込み発話は、ターンの始めに言いよどみやフィラーが認められなかった。

例 10. 趣味の釣りについて

R: あのー、釣りはどの辺にいらっ

E73: 海釣り、伊豆とあと外房まー、アジダが一番多いんですけど、外房かあと伊豆ですね、ええ。

4-4-3. 疑問生起による割り込み

例 11 は、聞き手である R が、E の話の内容で明確でない点を確認するために割り込んで質問・確認をしている。この割り込みは、不明瞭さを残したまま会話を持続させないという聞き手側の意識の現れであると考えられる。

「帰国」の意味が明確に理解できないため「帰国子女」かどうかを質問しているが、E は「帰国子女ですの」と簡単に対応した後、言いさし部分に続けて自己補完している。つまり、割り込まれたにもかかわらず、第一話者はターンを維持して、自分で初めのターンに続ける形で文を完結して

いる。

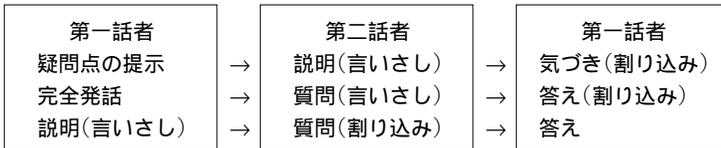
疑問生起による割り込みの連鎖は、割り込みではあるが、短く簡潔に質問することで、第一話者の話の流れを壊したり、話の腰を折ったりすることがない聞き手としての配慮であると捉えられる。そして、第一話者も話し手として、相手の疑問に簡潔に答えて円滑な会話を進める責任を果たしている。

例 11. (外国との習慣の違いについて)

- E64: そうですねー。あの一、今のその、習ったり習われたりのこととは違うんですけど、娘のお友達で (R: うん)、帰国の坊ちゃんが、
 R: 帰国子女ですか?
 E64: 帰国子女ですので (R: はい)、あの一、男の子が遊びに来たことがあってね、...

このような聞き手に特別強い動機があるわけではないが、話し手の意図の分かった時点、思いついた時点で、すぐ質問に答えたり、確認したりするという例は多く見られた。それらは、会話の時間的効率を目的とした言語行動であり、Grice (1975)²⁾ の量の格率「無駄な話はしない」に倣えば、「無駄な時間をかけない」という言語行動である。会話の参加者は、常に効率的な話し方を期待されているとも判断できる。

【連鎖 5: 時間節約の割り込みの連鎖】



4-5. 第一話者の話の内容が引き起こした割り込み

4-5-1. 話者を助けるための割り込み

話者が名前を忘れるなど困っている場合に、聞き手がその情報を持っていれば、尋ねられなくても即座に相手を助ける言語行動をとる例が見られた。例 12 では、E の「名前を忘れた」という言葉を受けて、R が割り込

んで「～かな」という遠慮がちな表現で教えている。初めは、その言葉を無視して話していた E であったが、R の二回目の発言で受け入れて、「ええ」と対応して発話を続けている。

この割り込みは、話し手が不明瞭さを抱えたまま会話を維持することを、聞き手が避けようとしたために生じた割り込みであり、話し手の発話内容を全部察したわけではなく、部分的内容について聞き手の方が情報を持っていた場合に、話し手を助ける言語行為だと判断できる。

例 12. (オリンピックで印象的だったシーンについて)

E72: それから、柔道の (R: うーん)、あの一、名前は忘れちゃけれども、あの一、判定で (R: 篠原かな)、判定の

R: 篠原さんかな

E72: ええ、あの一、審判の間違いによって (R: ええ)、判定が銀になってしまいましたよね (R: うん)。で、あれっていうのも、...

4-5-2. 訂正のための割り込み

相手の話に誤りがあるとき、その文を完結する前に割り込んで訂正をしている。相手の発話に誤りを含んだまま最後まで言わさないことが聞き手の役割であることを示しているように考えられる。その場合、誤り部分を述べている途中で割り込みをして即座に間違いを正すのではなく、「やー」「というか」などのフィラーや相手の言葉に続くような言葉でターンをとって、若干の時間を置いてから訂正を行っている。これらの言葉は、ターンを取る機能を持つと共に、言葉の重なりがない状態になってから相手に注目させて誤りを正すという機能も持っていると考えられ、この点で助けるための割り込みと異なる。

例 13, 14 のように、第二話者は、「アメリカの経験もあり」、「テレビやニュースで」などの明らかな誤り部分を聞いた直後に反応していることから、第一話者の話の内容全体について察しをしたとは言えない。

例 13. (海外経験について)

R: じゃ堅い話じゃなくて (E57: はい)、今アメリカ、アメリカの経験もあり

E57: やアメリカはないです、トランジットで行くだけでー (R: はい)、あとはグアムとかサイパンとかそういうところは行ったことがありますけど、本土に足をおろしたことはないです (R: ふーん)。

例 14. (オリンピックについて)

R: はい。あのー、××、で、全然話が別で、オリンピックは見ていました？

E71: 見てないです。

R: 興味がない。

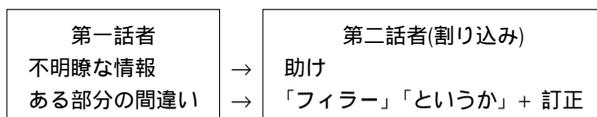
E71: ここんどこ仕事が忙しかったんですよ。

R: まー、じゃ、ちらちらぐらいテレビとかニュースで

E71: というか、人の話で (R: はい) だれだれが勝ったとかそういうのは、はい。

これらの割り込みは、第一話者の不明瞭・不正確な発話が原因となった割り込みであり、力関係ではなく情報の正確さを上げるという会話参加者としての役割を果たしていると考えられる。

【連鎖 6: 間違い—割り込み訂正の連鎖】



5. 考 察

以上のように、「言いさし—割り込み」の連鎖が示すとおり、コミュニケーション上の制度性が存在することを具体的に示すことができた。

「言いさし—割り込み」の連鎖の結果を表2にまとめた。割り込みをした話者の欄は斜線  で、また、その話題についての情報を持っていて言いさしをした話者の欄は横線  で、その話題についての情報を持っていて割り込みをした話者は、影  で示してある。

この表から、情報を持っている話者も、情報を受ける立場の話者も割り込みをすることがわかる。つまり、割り込みをした話者が相手の話を先取りして察しているとは一概に言えず、むしろ、予測による先取りより、言

日本語インタビューにおける「言いさし—割り込み」の連鎖

表2. 「言いさし—割り込み」の連鎖まとめ

連載	第一話者	第二話者	第一話者	機能	割り込みの要因	役割、権力・協調
1	言いさし	はいわがました+新話題		話題転換	第2話者の会話管理能力	第2話者の権力
2	完全発話	言いさし	「やっぱり」+続き	話題維持	第1話者の会話維持力	第1話者の権力
3	言いさし	「それはちょっと」+「でも」+反		反論	第1話者の話の内容	第2話者の強い動機
3	言いさし	「あ、そうですね」「ついで		意見	同上	第1話者の譲り
4	言いさし(説明)	同調発話	自己による継続	話題の盛り上げ	話題への共感	第2話者の協調
4	言いさし(説明)	強調点付け加え	自己による続き補完	相手の話強調	話題への共感	第2話者の協調
5	疑問点の提示	言いさし	「あーあー」+思いつき	思いつき	時間的節約(早い察し)	会話参加者としての役割
5	言いさし(質問)	割り込み返答		質問に対する答え	時間的節約(早い察し)	会話参加者としての役割
5	言いさし	言いさし疑問	答え+続き	疑問生起	時間的節約(第2話者の疑問)	会話参加者としての役割
6	情報欠如の言いさし	助け情報		話者助け	第1話者の不明瞭な話	会話参加者としての役割
6	誤り情報の言いさし	「やー」「どうか」+訂正		訂正	第1話者の誤り	会話参加者としての役割

語的に明確に理解した後から割り込みをしている場合が多く、文化や話者の前提知識から察している場合は少ないと言える。

また、割り込みの機能はさまざまで、割り込みを生む要因も会話参加者双方にあり、割り込みする側の一方的な行動ではない場合が多いこともわかった。力関係を示した攻撃的行為というより、会話を盛り上げたり、強調したり、不明瞭さを無くしたりすることで、会話参加者の役割としてより充実した会話を作り上げようとして割り込みは行われている。割り込みは、対人関係において、一見攻撃的行為のように見えるが、割り込むことで自己主張はしていても、他者を否定するものではなく、自他が調和して会話を作り上げていると考えられる。

それは、平木(1993)の分類(表1)の中の主張的行動にあたり、つまり、アサーティブな行為であると言える。アサーティブとは、アルベルティとエモンズ(1994)によると、人が自分の感情・態度、願望、意見、権利を直接率直、かつ正直に表すと共に、一方で他者の感情・態度、意見、権利を尊重するような自己主張の仕方であるとしている。深田(1998)がアサーティブ行動を対人関係に配慮した自己主張であると指摘するように、「言いさし—割り込み」の連鎖の多くは、会話参加者として会話を共に作り上げる役割を果たしている相互行為のコミュニケーションであり、互いを尊重する自己主張の連鎖であると判断できる。

さらに、割り込む際にフィラーや繰り返しをはじめとする決まった表現を使うことで、発話開始の意思を伝え、それによりターンが円滑に移行しており、このことから、割り込みをアサーティブな行動にするための言語的なルールもあると言える。

今回は、ACTFL-OPIの形式における初対面の二者によるインタビューに現れた「言いさし—割り込み」の連鎖から会話の制度性を分析したが、日常会話では、インタビューする人とされる人という役割が固定していないため、何かを相手から聞きだしたり、答えたりする責任があるわけではなく、会話を共に作り上げるという動機付けが希薄になるのではないかと考えられる。また、初対面でなければ、相手に対する遠慮の度合いは低くなり、自己主張の仕方に影響があるのではないかと予測される。このような面にも注目して、今後は、一般的な日常会話においても同様の連鎖が見られるのかどうかという疑問にも答えしていきたい。

注

- 1) ACTFL-OPI: 全米外国語教育協会の方式によるインタビュー形式の口頭表現能力試験。詳しくは『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』を参照。
- 2) Grice(1975)は、会話のやり取りは協調的作業であり、会話の各参加者が守ることが期待されている原則があり、その原則にかなった結果を得るために、協調の原則(cooperative principles)として、4つの格率(量の格率、質の格率、関係の格率、様態の格率)を提案した。

引用・参考文献

- アルベルティ、R. E.・エモンズ、M. L. (菅沼憲治・ミラー、H. 訳) (1994) 『自己主張トレーニング』東京図書。
- 上村隆一 編 (1998) 「文部省科学研究費補助金重点領域研究: 日本語会話データベースの構築と談話分析」『じんもんこん DATABASE』、神奈川: 重点領域「人文科学とコンピュータ」総括班総合研究大学院大学 Vol. 1。
- 荻原稚佳子 (2001) 『日本語母語話者間のインタビューにおける「言いさし」に対応する「察し」の現れ』(青山学院大学国際政治経済研究科国際コミュニケーション修士論文)。
- 金田一春彦 (1975) 『日本人の言語表現』講談社。
- 平木典子 (1993) 『アサーショントレーニング』金子書房。
- 深田博己 (1998) 『インターパーソナル・コミュニケーション』北大路書房。
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版。
- メイナード、泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版。
- 好井裕明 (1999) 『批判的エスノメソドロジーの語り』新曜社。
- Swender, E. 編(日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム 訳) (1999) 『ACT-FL-OPI 試験官養成マニュアル』アルク。
- Greenwood, A. (1989). *Discourse variation and social comfort: A study of topic initiation and interruption patterns in the dinner conversation of preadolescent children*. Ph.D. dissertation, City University of New York.
- Maynard, S. (1987). *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ: Ablex.
- Sacks, H, Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A Simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4), 696-735.
- Tannen, D. (1984). *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Norwood, NJ: Ablex.
- Yamada, H. (1992). *American and Japanese business discourse: A comparison of interactional styles*. Norwood, NJ: Ablex.
- West, C., & Zimmerman, D. H. (1983). Small insults: A study of interruptions in cross-sex conversations between unacquainted persons. In B. Thorne, C. Kramarae & Nancy Henley (Eds.), *Language, gender and society* (pp. 103-117). Rowley, MA: Newbury House.